



**Data**

監督・脚本：鶴橋康夫  
 原作：小松重男『蚤とり侍』（光文社文庫刊）  
 出演：阿部寛／寺島しのぶ／豊川悦司／斎藤工／風間杜夫／大竹しのぶ／前田敦子／松重豊／桂文枝

■□■ショートコメント■□■

◆『後妻業の女』（16年）における「後妻業」ならまだわかるが、江戸時代に実在したという「蚤とり侍」とは一体ナニ？鶴橋康夫監督が歴史小説の第一人者・小松重男の傑作短編集『蚤とり侍』の中の人気エピソードを元に自ら脚本を書き監督をした本作は、時代劇漫画の醍醐味でいっぱい。

主役の小林寛之進を演ずる阿部寛のナレーションを多用するのは如何なものだが、わかりやすさという意味ではTVドラマと同じで、それなりの楽しさが・・・。

◆本作導入部では、①越後長岡藩のパカ藩主（？）、牧野備前守忠精（松重豊）から「蚤とり侍になって無様に暮らせ！」と宣告され、藩から追放された寛之進が、②“のみとり”屋の親分、甚兵衛（風間杜夫）とその妻で女将のお鈴（大竹しのぶ）から暖かく迎えられ、③貧乏長屋で貧しい子供たちに無償で読み書きを教える寺子屋の先生、佐伯友之介（斎藤工）らと共に新たな生活に入っていく風景が、ユーモアたっぷりに描かれる。

時は、十代将軍・徳川家治の時代。時の権力者、田沼意次（桂文枝）は今の日銀総裁・黒田東彦氏と同じような「金融緩和策」をとり、世の中にカネがジャブジャブ回る政策をひた進めたが、そのことの是非は・・・？そして、それによる、“富める層”と“貧しき層”の二分化は・・・？

◆まあ、そんな難しい話はさておき、ストーリーが急展開するのは、④寛之進にとって初の“のみとり”客となる亡き妻・千鶴に瓜二つの女・おみね（寺島しのぶ）から「下手クソ」と罵倒されたこと、⑤恐妻おちえ（前田敦子）のとんでもない“浮気防止策”に苦勞しながらも、寛之進に“のみとり”の指南を授ける良き友人、清兵衛（豊川悦司）との交

流が始まること。これによって⑥以降、寛之進がメキメキ“のみとり業”で頭角を現してくるサマに注目だが、⑦ “のみとり”稼業を職業として許可していた時の権力者、田沼意次が失脚してしまい、“のみとり業”が違法として取り締まりを受けることになること……。

◆本作のチラシを飾る阿部寛の写真は、手塚治虫が写楽をパロディで描いた『猫・写楽』を元に創造した蚤とり侍のイメージで、その隣には「貴女のみ、愛しています。」との文字が。3月12日に見た『娼年』（18年）は、松坂桃李の文字通り“裸の熱演”で現代版の「娼夫」の奮闘と成長を描いたリアルな物語だった。それに対して、同じ女性に対する性的サービス業であっても、本作はあくまで漫画的かつ風刺的だから、その対比をしっかりと。

もっとも、本作は田沼意次役を演ずる桂文枝師匠のセリフが聞き取りにくいのが少し難点。芸達者な俳優陣をこれだけ揃え、その全員にユーモアたっぷりの演技をさせるのなら、せめて田沼意次役だけは文枝師匠ではなく、本物の「堅物俳優」を据えてもよかったのでは……。

2018（平成30）年4月20日記